

精神科第一病棟のこの一年

神経精神科第一病棟看護科長 濱田 譲

平成17年、第一病棟の看護目標は、昨年同様①適切な看護の提供②事故防止に努める③接遇に努めるとした。その理由は、今の時代のキーワードであると考えからである。2年続けて同じ目標とした結果、スタッフ個々の中に少しずつ努力の芽が育ちはじめている。しかしながら、事故防止については、以前として転倒・転落事故が目立ち、看護師個々の予測についての認識が、今一つ欠けている部分があり、これからはしっかりとした教育の必要性を感じている。

今年も大学の事情と研修医制度の影響により、医師確保が厳しい状態である。今年は、医師3名体制であったが、3月と6月に医師が退職、7月より鎌田医長1名での診療体制となってしまった。それに伴い、旭川医大や旭川市内の民間病院の協力を得て、週4日間外来診療への応援を頂き精神科診療を行っている。しかしながら、外来と病棟を医師1名で診療は当然限界があり、外来患者の診療が最優先のため、病棟は日々とまどいと不安の中での医療や看護を強いられる結果となっている。

また、医師の減少に伴い、入院患者については、医療支援室の協力を得て、他施設への転院や老健施設、また自宅への退院を促進し、更には入院も極力控え、12月末には、2つの棟合わせて50床程度にまで減少させた。

平成17年の第一病棟の患者動向は、入院71名（内、第二病棟からの転入は24名、他施設から4名）で、退院は109名（内、第二病棟への転出が7名、転院が25名、自宅へ70名、死亡が1名）で

あった。疾患の内訳は、統合失調症が40.8%、抑うつ患者が28.2%、次いで多量服薬が9.9%などであった。この1年の1ヶ月の平均入院患者数は37.2人である。しかし、転院して頂く患者には様々な条件や制約があり、残された患者は高齢で、しかも平均入院患者数の69%が転倒転落危険度Ⅲレベル、また身体合併症患者も約20%を占め、相変わらず日々のケアにはマンパワーが必要としたが、入院患者数が少ない分、看護師にゆとりと余裕を持って看護を提供できたことが転倒や転落事故の減少につながったのは、皮肉な現象である。

看護スタッフは新人看護師の配置はなかったものの、3月に看護係長の異動をはじめ頻回に看護師の異動が行われた。

また昨年受審した病院機能評価については、確認審査を受けることとなり、精神科の問題では関係部署や担当者のご協力を得て、無事審査がクリア出来たことについてご協力頂きました方々に感謝申し上げます。

当院精神科は、上川北部地域の唯一の入院施設を有する病院である。

平成16年に士別市立総合病院の精神科病棟閉鎖に伴い、士別地域からの通院や入院患者が増加する中で医師不足の理由とは言え、当院の病棟縮小は当地域における精神障害者の方々やご家族の方々に多大なご不便をおかけしていると思っています。このような現状ですが、何とか当地域での精神医療を確保するために関係機関の努力に期待しております。